

標本のミカタ ～収蔵資料の価値～

スペシャル企画「標本のミカタ～コレクションから新しい発見を生み出す～」

第8回 「コレクションをもっと活用するには？」

日 時：平成31年2月11日(月・祝) 13:00～16:30

場 所：兵庫県立人と自然の博物館 4階ひとはくサロン等

人と自然の博物館の収蔵資料は、昆虫約100万点、キノコやコケ類も含めた植物約60万点、岩石・化石・ボーリングコア等約10万点と膨大な数にのぼります。常設展示コーナーに出ている標本は1万点程ですから、常時お見せ出来ているのは収蔵資料の1%にも届きません。理由は2つあります。1つ目は資料の保全の問題です。生物の乾燥標本は高温多湿な日本の環境ではカビ害や虫害を受ける恐れがあり、温湿度管理の可能な閉鎖環境での保管が必要です。資料を将来の世代に受け継ぐことは博物館の使命のひとつですから、やむを得ないことです。2つ目は、展示空間の広さの問題です。収蔵庫では、できるだけスペースを無駄にせぬよう隙間なく資料を収納します。たとえば昆虫標本は、ドイツ箱という定型のガラス蓋がついた木箱に収納しますが、収蔵した状態の標本をそのまま展示に使うことはできません。その虫が何処でとった何という虫なのかという説明をつける必要もありますし、見やすい資料の配置にする必要もあります。展示をする際には、標本を展示用に配置しなおしたドイツ箱のセットを作成しています。もし今ある資料を全て展示したら、一体どれ程のスペースが必要になるか見当もつきません。それに、ただやみくもに資料を並べても、来館者の方は全てを見る前に疲れ切ってしまうことでしょう。

それなら、もっと資料をお見せする機会を増やすことはできないだろうか。これまでも収蔵資料展や企画展等、1～2カ月という期間を区切って収蔵庫にある資料を展示してきましたが、もっと資料を見せる機会を作らなければという機運がありました。1992年の開館から30年近い年月がたち、収蔵庫は満杯になりました。資料を収集するのも博物館の使命、時間が経てば資料は増えます。それらは兵庫の自然とその変遷を物語る(でも物言わぬ)証拠であり、実物つきのデータです。これまでを振り返り、これからの自然環境について考える大切な資料になります。一方で、「どうしてこんなにたくさん同じものを集めるの?」「標本は1種につき1点で良いのでは?」「標本庫がいっぱいなら古いものから捨てたら?」という声も聞こえてきます。恐竜の化石や、ワシントン条約に載るような美しいチョウの標本など価値が判り易いものとはかく、何処にでもいる・あると思われる生物や岩石の標本の価値を社会に認めて頂くのは、簡単なことではありません。まずは標本を見ていただき、標本の美しさや調べることの面白さを知っていただいて、標本の価値が判る人を増やしていかなければ。「標本のミカタ」は、研究員のそんな思いを反映して生まれた企画です。

月に一度、一日だけ、特定の分野の資料を沢山ならべてじっくり眺めていただく、資料にまつわる話を聞いていただくのはどうだろうか。古写真や絵図のように紫外線による退色が懸念される資料は、たとえ数カ月でも外に出しておくのは難しいですが、1日だけなら展示できます。まだ実現していませんが、生のキノコを色々展示することも1日ならできそうです。期間を1日と区切ることで、これまでとは少し違った資料の見せ方ができるのではないかと考え、トライすることにしました。

植物標本は多くが押し葉で茶色く平板なため、博物館資料の中でもとりわけ地味な存在です。また台紙を含めて有機物の固まりですから、油断するとあっという間に虫食い状態になります。そのため、これまで積極的に展示に用いることはしませんでした。だからこそ標本のミカタでは、なるべく沢山の標本を出そうと考えました。1回目は「イネ科植物の世界」と題し、イネ科標本を50枚程展示しました。植物の中でもとりわけ地味なイネ科ですが、米、大麦、コムギ等世界の主要な穀物の多くはイネ科に属し、ヒトが日頃大変お世話になっている植物です。世界中に1万を超える種が知られる、大きな科でもあります。そのことを知って頂きたいと考えました。

当日は神戸大学森直樹教授に栽培コムギのお話をいただいた(写真1)こともあり、大変盛況でした。2回目は海の無脊椎動物であるイカやタコ、エビ、カニ等の液浸標本等を展示しました(写真2)。3回目は当時開催中だった江田コレクション展の解説も兼ねて「美しい昆虫標本～江田コレクションの魅力」を行いました(写真3)。4回目は「いろんな資料で見る阪神間の風景」と題し、西国名所図会や、阪神大水害の様子を写した絵葉書などを展示しました。5回目は当館収蔵のアンモナイトを一堂に展示しました(写真4)。アンケートの結果をみるといずれも好評を博したようですし、会を重ねるにつれ「標本のミカタをめがけてきました」と仰るリピーターのお客様(なんと小学生!)も現れました。一日だけの企画なので、前日～当日朝設営、標本のミカタ開催、閉館後撤収となかなか慌ただしいのですが、「そういえばこんな資料があったな」等、準備する側も色々と思い出したり、資料の片付けの際に収蔵庫をちょっと整理したりできて、良い効果を生んでいます。さて、来年は何の標本をお見せしましょうか。もしリクエストがありましたら、博物館までお知らせください。

高野 温子(自然・環境評価研究部)



写真1 神戸大学森直樹教授による、栽培コムギの起源の講義



写真2 イカやタコ等の液浸標本を珍しげに眺める子どもたち



写真3 美しい昆虫が多い江田コレクションの展示解説



写真4 たくさん並んだアンモナイトを一生懸命触っている子どもたち